

世界の平和を担って

イズコ神父

1981年教皇ヨハネパウロ二世は、広島で「過去を振り返ることは将来に対する責任を担うことである」、と述べられました。このように私たちも毎年広島や長崎の事実を思い起こすために、8月6日から15日までの10日間を「日本カトリック平和旬間」と決めました。広島では全国から多くの信者が集まり「平和祈願ミサ」が奉げられますが、各教区でも平和を求める祈りといろいろな活動が行われます。

8月の15日には、私たちは毎年「聖母の被昇天」を祝っています。天国に昇られたマリア様の姿を見て、また、復活されたイエス・キリストの姿を思いながら、私は直ぐ一人のスペインの詩人の言葉を思い出します。『よい牧舎よ、この暗い谷に羊を残して、安全な所、永遠の命の所へ昇っていかれますか』

今日、聖母マリアに向かって、同じような文句のような祈りをしたいと思えます、天に昇られるマリアの姿を見ながら、この世に残っている私たちが寂しくならないで、平和と兄弟の世界を作ることができますように祈りたいと思えます。なぜなら、今の世界には国と国の間の分裂や敵対が増え、武器が広がり、豊かな国が勝手に閉じられ、貧しいひとが切望に陥る・・・また、この私たちの宗教（キリスト教、仏教、イスラム教、神道）を見ると、平和という目的を担っていかなければならないと思いませんか。そのために、今からどうすればいいのでしょうか。少しでも考えてみましょう。

この間、7月の3日にローマのバチカンの「セニット」というニュースの中に、3分間のフィルムを通して、今の世界のもっと大事な宗教の指導者の大事な言葉を発表しました。そのメッセージは自分の宗教を受け入れなさいという招きではなく「諸宗教の信者さん方が仲良くして、神様の名によって暴力すること、他国を支配することをやめましょう」というメッセージでした。そして、多くの指導者たちの具体的な言葉を知らせてくれました。少しでもまとめてみましょう。

「それほど違う人間である私たちが、そんなにたくさんの心理、希望、恐れ・・・を分かち合うことができるのは、何とすばらしいことです、話すことより今は互いに聞く時間ではないでしょうか」（チベットの仏教リンポシェ）、
「友になると、多くの先入観がなくなり、新しい見通しが生まれ、希望は強くなる」（イギリス教会の大司教ヤケレン）、「合いましょう、集まって互いに知

り合いましょう。そうすれば一致することが多くて、素晴らしいことであるのを驚くでしょう」(ヤトラ、AL・QAZWINI)、「すべての宗教を尊敬しましょう。自分の宗教と同じように」(ヒンズー教、サンカー)、「山の山頂に登る道はいろいろある、大事なことは山頂に着く、互いに助けながら登りましょう」(シーク宗教、B・SAHIB)。

「教皇様に出会って友になったのは、二人の宗教のおかげでした」(ラビ・SHORKA、アルゼンチンのユダヤ人)、「お二人の信仰によって仲よくすることができましたし、友であるラビ・SHORKAの説明と友情によって大変祝福されました」(教皇フランシスコ)。一人のイスラム教の先生、AL・MILLANI、敢えて勧めます：「どんな宗教のよい信者と仲良くしなさい」・ギリシャ教会の大司教バルトロメは：「すべての人の上に輝く神の美しさを深く見出すために、相手の目をゆっくり見るように招かれています」。

これまでの証しのことばはバチカンによって出された3分間のビデオにあります。目的はみんなが友になることができるように、たとえ宗教が違っても、新しいメッセージ？しかし、聖パウロはじめ、教会の先生たちは昔から教えてきました：良いもの、真理のもの、正しいものは、全て、どんな人の内であっても、神からの物です。

大事にしましょう。喜んで迎えましょう。